

## 第37回神戸女学院大学英語英文学会 (KCSSES) 大会報告

英文学科長 立石 浩一

英文学科卒業生・大学院生・大学院修了生の研究発展および在学生の向学意欲の推進を目的として設立された神戸女学院大学英文学会 (KCELS) は、2011年度の第35回大会より名称を神戸女学院大学英語英文学会 (KCSSES) と改称し、3年目を迎えた。例年通り11月の最終金曜日、30日に午後2時からL-28教室で開催された。特別講演とOG・院修了生の研究発表という2部構成で、今回は英米文学・文化コースが学会準備を担当した。

特別講演は、神戸市外国語大学英米学科教授の新野 緑先生に、「ジェイン・オースティンと邸宅」という標題でご講演いただいた。「田舎の邸宅 (カントリー・ハウス)」が、小説の単なる舞台背景としてではなく、オースティンの時代の地主層、ジェントリ階級の象徴として描かれ、屋敷の描写、あるいはその欠如が、当時のジェントリ階級の上流階級としての価値観、輪郭、そしてそれらの喪失を描写する表象になっている事を指摘された。活発な議論が行われ、大変興味深いご講演であった。

研究発表では、本学卒業生で、現在関西学院大学大学院文学研究科博士後期課程在学の江崎 早苗氏より「A Minimalist Approach to Tough-Construction」、そして本学大学院文学研究科英文学専攻博士後期課程在学の姫野 智子氏より「The Ruined Cottage MS BからMS Dへの改訂に見られる対話の重要性」についてご発表いただいた。どちらも大変興味深い内容で、質問も活発に行われた。

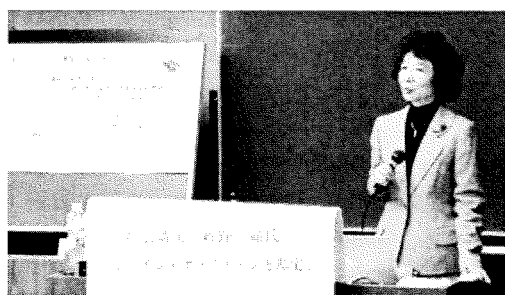
当日までご尽力くださった主幹幹事の溝口先生、ご参加くださった皆様、及び日頃KCSSESをご支援いただいている会員の皆様に厚く御礼申し上げます。

## 特別講演

ジェイン・オースティンと邸宅

神戸市外国語大学英米学科教授 新野 緑

「地方の村の三つか四つの家族こそ、小説で取り組むのにうってつけです。」オースティンが姪アンナに書き送ったこの言葉は、彼女の小説世界を典型的に表すものとして、しばしば引用される。「地方の村の家族」とは、「ジェントリ」と呼ばれる裕福な上層中産階級を指し、彼らの住まうカントリー・ハウス、つまり田園地帯にある邸宅が小説の主な舞台となる。しかし、オースティン小説において、カントリー・ハウスは、物語の背景として存在するのではない。『ノーサンガー・アビィ』(1818)や『マンスフィールド・パーク』(1814)など、複数の作品が屋敷の名称を表題とすることは、彼女の小説におけるカントリー・ハウスの重要性を示唆するだろう。代表作を取り上げながら、田舎の邸宅が作品に持つ意義を探ってみよう。



『ノーサンガー・アビィ』は、1790年代をピークにイギリスで流行したゴシック小説を揶揄する作品と評されている。たしかに、ヒロインのキャサリンがバスで出会った青年ヘンリーの館を訪れ、中世の僧院を改良したその屋敷に愛読するゴシック小説を重ねて、様々な失態を繰り返すこの物語が、『ドン・キホーテ』と同じく、過去に流行した文学ジャンルのパロディを企図しているのは明らかだ。しかし、ヘンリー



の父親で館の当主のティルニー将軍がもたらした最新の「改良」を批判するキャサリンのまなざしは、同時に、近代消費社会のジェントリ階級への浸透の様を暴き出している。将軍にゴシック小説の暴君を重ねるキャサリンの妄想と思われたものが、はるかに洗練された知性や感性を持つヘンリー兄妹でさえ捉えることのできない将軍の本質を明るみに出す皮肉。揶揄される者と揶揄する者が一瞬の内に立場を変えるオースティン特有の瞬間が、屋敷の描写を通して浮き彫りになる。

『ノーサンガー・アビィ』に続く『高慢と偏見』(1813)は、近隣の屋敷に引っ越して来たビングリーの友人で、血筋の良さと莫大な財産を誇るダーシーが、舞踏会で見せた高慢な態度に憤り、彼を忌み嫌っていたヒロインのエリザベスが、その歪んだ「第一印象」を是正される過程を描く。彼女がダーシーへの偏見を捨て、その本質を見きわめる物語のクライマックスが、彼の屋敷であるペンバリーをエリザベスが訪問する場面となるのは、この物語におけるカントリー・ハウスの重要性を明らかにする。圧倒的な館の優美さを目の当たりにしたエリザベスが、「この屋敷の女主人になるのも悪くはない」と考えるのは、富や地位に敏感な彼女の現金さの表れとされてきた。しかし、彼女の視線をなぞるように描かれる屋敷の詳細な描写は、彼女の心を動かしたものの正体を示唆する。屋敷の解説を通して、彼女はそれまで見ることのできなかったダーシーの優れた本質に触れたのだ。庭園をも含めた屋敷の在り方がその当主の精神性を象徴するという設定は、『ノーサンガー・アビィ』にも通じるが、「人間観察家」を自負するエリザベスが、ダーシー本人を直接「見る」のではなく、屋敷や肖像画といった表象を間接的に「読む」ことによるのみその本質を理解するのは、エリザベスとダーシーの結婚でめでたく幕を閉じるこのシンデレラ物語に、微妙な陰影を与えもするだろう。階層にふさわしい教養とマナーとを重んじるジェントリの価値の維持や継承への危機感が、そこに見てとれる。

『ノーサンガー・アビィ』と同じく、屋敷名を表題とする『マンスフィールド・パーク』は、准男爵サー・トマス令夫人となった伯母の館に引き取られた貧しい軍人の娘ファニーが、最終的にその価値を認められて館の次男エドモンドと結婚、館の将来の後継者となることを暗示される一種の「みにくいアヒルの子」の物語である。サー・トマスの実の子供たちの道徳的墮落が次々と露呈し、館の秩序の崩壊が明らかになる一方で、マライアの結婚相手ラッシュワスの屋敷である

サザトンや、エドモンドが赴任する牧師館ソーントン・レイシーの「改良」が、登場人物達の熱心な興味の対象として詳細に描かれる。しかし、先に見た二作品とは異なり、サザトンの屋敷は当主の人格について何一つ語らないし、奇妙なことに、肝腎のマンスフィールド・パークの館や庭が具体的に描写されることもほとんどない。そこに示されてあるのは、すでに明確な文化的、社会的意義を失い、輪郭が揺らぎつつあるジェントリの有りようだ。したがって、以後彼女がジェントリの凋落をテーマとする作品を書いて行くのも当然の成り行きと言える。

オースティン小説の邸宅は、確かに16世紀からのカントリー・ハウス・ポエムの伝統を引いている。しかし、その屋敷の描写の変遷の過程をたどれば、イギリス社会の中心をなし、作家自身が属するジェントリ階級とその文化への密かな危機感と、移り行く時代への鋭敏な社会感覚をはっきりと読み取ることができる。

## 発表要旨

### A Minimalist Approach to *Tough-Construction* キーワード: A/A-bar, *Mov*-movement, Theta-role

江崎 早苗

関西学院大学大学院文学研究科博士後期課程

Tough-Movement (TMov)がtensed S conditionに従うか否かの点において個人的方言差が存在する事実と、idiom chunksからのTMovがA-movementと同様の特徴を示すことから、Tough-Construction (TC)はA/A-bar movementの両方どちらにおいても生成され、その生成方法の選択には地域的方言差ではなく個人的方言差が存在することを前提とし、Nanni (1977)とは違う新たなA-movementにおける統語的メカニズムを提案し、その妥当性を示した。ここでは、Tough-predicate adjectiveにTheta-roleの様な意味に関するものをexternal positionに出す場合とそうではない場合のパラメータを設定し、そのパラメータによってTMovが起きる場合とExpletive (It)が挿入される場合があるとした。このことにより従来の研究では説明困難なTCにおける統語的特異性を過不足なく説明できTMovとItが挿入される場合との違いを説明した。

## 発表要旨

### The Ruined Cottage MS BからMS Dへの改訂に見られる対話の重要性

姫野 智子

神戸女学院大学大学院文学研究科英文学専攻博士後期課程

ワーズワスは唯一の戯曲、The Borderersを書き終えた直後の1797年4月に“The Ruined Cottage” (MS A)に着手した。“The Ruined Cottage”はその後MS B (1798年), MS D (1799年), MS E (1814年)と修正がなされ、MS Eは1814年に*The Excursion*の一部となって出版された。更にワーズワスはMS Eに1845年に最後の修正をするものの、“The Ruined Cottage”を一つの独立した作品として認めたのは彼自身ではなく、Jonathan Wordsworthになり、彼の*The Music of Humanity* (1969)においてであった。本発表において、なぜワーズワスが50箇所近くを変更したのか、その意図を考察した。その結果、ワーズワスは友人コールリッジを通してドイツ文学に触れていたことからゲーテの詩*Der Wanderer*に大きく影響されていたことが明白になった。ゲーテの詩を通してワーズワスは、対話形式の詩を試みたのだ。それは、一方的な主観性を抑えるべく、他者と対話することで、読者、ひいては、自然を含む第三者との精神のより根源的な部分での繋がりを生むための配慮をしたといえるのではないだろうか。”*The Ruined Cottage*” (MS D)で加筆された「対話」をとおして、ワーズワスは他者との心の「対話」を大切に人間本来の喜びを忘れた状態を「悲劇」と捉えようとしたことがわかる。

#### 英文学科卒業論文・プロジェクトコンテスト

2008年から卒業論文および卒業プロジェクトのコンテストを開催することとなり、今年度は担当教員からの推薦による応募を受けつけた。全体では17名の応募があり、2月に英米文学、英語学、グローバル・スタディーズ、通訳・翻訳の各部門で選考が行われた。最優秀賞受賞者、優秀賞受賞者は次の通り。なお、最優秀者の論文は、『優秀卒業論文・プロジェクト集』(2013年度春刊行予定)に掲載する。

#### 英米文学 (応募者数 4名)

<最優秀賞>

E09162 戸倉 仁美

<優秀賞>

E09072 小谷 晟子

E09152 高原 瞳

E09196 竹田やよい

#### 英語学 (応募者数 5名)

<最優秀賞>

該当者なし

<優秀賞>

E09092 森西 愛

E09194 吉武 恵美

#### グローバル・スタディーズ (応募者数 7名)

<最優秀賞>

E09095 村上かほる

E09120 岡田 初実

<優秀賞>

該当者なし

#### 通訳・翻訳 (応募者数 1名)

<最優秀賞>

E09118 大原 璃子

<優秀賞>

該当者なし

## キャンパスニュース

#### <2013年4月より就任>

\*Goran VAAGE氏が、専任講師として本年4月に就任されます。

## 国際学会発表

#### \* 栗栖和孝氏

東京、国立国語研究所で開催されたThe 20th Japanese/Korean Linguistics Conference(2012年10月1-3日)にて研究発表。“The Phonology of Emphatic Morphology in Japanese Mimetics”

#### \* 奥本京子氏

中国、西安の陝西師範大学で開催された 中国平和学会第3回大会 (2012年4月21-22日)にて研究発表。

“The Arts-Based Approach in Conflict Transformation: Based on the TRANSCEND Theory”

三重大学環境情報センターで開催された International Peace Research Association

(2012年11月24-28日)にて研究発表。“Dynamic Peace and Art That Reveals and Highlights Conflict”

中国、ハルビンのハルビン師範大学で開催された中国平和学会第4回大会(2013年1月5-6日)にて研究発表。“Peace to Be Taught and Nurtured: NARPI Project”

#### \* 齋藤安以子氏

マルタ共和国、コリンシア・サン・ジョージホテルで開催されたPoetics and Linguistics Association (PALA) (2012年7月6-18日)にて研究発表。“Are You Fair? Are You Honest?: A Study on a Japanese-English Dictionary Revision Project with Bilingual Peers”

カナダ、ヴィクトリア大学で開催されたInternational Association of Performing Language(2012年8月7-8日)にて研究発表。“Micro Acting for Young EFL Learners in Japanese Elementary Schools”

#### \* 高村峰生氏

ベルギー、Université de Louvainで開催された”Paradoxes of the Threshold” : Literature, Place and the Environment in the 19th-21th Century Literatures (2012年10月25-26日)にて研究発表。“Meditated Spatiality and the Post-human Body in Don Delillo’s Novels”

#### \* 田辺希久子氏

イギリス、University of East Angliaで開催されたBAJS Conference 2012 (2012年9月6-7日)にて研究発表。“A Study on Japanese Translators’ Lived Experiences”

#### \* Yolanda TSUDA氏

アメリカ、John Jay大学で開催された10th Biennial John Jay International Conference on Global Perspectives on Justice, Security and Human Rights (2012年6月5-9日)にて研究発表。“Language Rights as Human Rights in a Monocultural Society: A Case Study of Japan”

#### \* 鞆野ひろ子氏

米国、デンバーで開催されたThe Triennial International Conference of the Society for

the Study of American Women Writers (2012年10月10-14日)にて研究発表。“The Study of Emily Dickinson’s Poetry in Japan”

#### \* 吉田純子氏

米国、ボストンのSimon Collegeで開催されたChildren’s Literature Association (2012年6月13-16日)にて研究発表。“The Wounded Healer in a 21th Century ‘Hansel and Gretel’: Katherine Paterson’s ‘The Same Stuff as Stars’”

中華民国(台湾)、台北市の東呉大学で開催されたTaiwan Children’s Literature Research Association (2012年11月16-17日)にて基調講演。“Constructed Children as In-between Spaces by Hyphenated American Writers”

東京、大東文化大学で開催された日本イギリス児童文学会国際シンポジウム “Research in Children’s Literature from Asian Perspectives” (2012年11月24-25日)にてコーディネーター・司会を務める。

### 記念賞

2012年度、以下の学生に対して、次の学内の記念賞が授与されました。

佐々城きく(女32C36)記念賞 E10152 田中 陽子

デフォレスト記念賞 E10059 小松明日香

丹部トモ(C41)記念賞 GE1104 山下 素子

### 会員による出版紹介

◇東森勲氏 『語用論』(中島信夫編、共著、朝倉書店、2012年8月刊)

『意味とコンテクスト』(ひつじ意味論講座6)(澤田治美編、共著、ひつじ書房、2012年11月刊)

◇小杉世氏 *He Maramataka Hapanihi* (3言語版CD付、Kaitoro Publishers, 2012年11月刊)

◇奥本京子氏 『みんながHappyになる方法: 関係をよくする3つの理論』(平和教育アニメーション・プロジェクト編集、共著、平和文化、2012年2月刊)

『グローバルキャリア教育：グローバル人材の育成』（友松篤信編集、共著、ナカニシヤ出版、2012年3月刊）

『平和ワークにおける芸術アプローチの可能性：ガルトゥングによる朗読劇*Ho'o Pono Pono: Pax Pacifica*からの考察』（単著、法律文化社、2012年3月刊）

◇齋藤安以子氏 *The Role of Stylistics in Japan: A Pedagogical Perspective* (Language and Literature May 2012/21: 226-244, 共著、SAGE, 2012年5月刊)

◇田辺希久子氏 『ケン・ブランチャード リーダーシップ論[完全版]』（ケン・ブランチャード他著、共訳、ダイヤモンド社、2012年12月刊）

## 神戸女学院大学英語英文学会 会則

(1995年 4月 1日施行)  
(2005年 9月 22日改訂)  
(2010年 3月 2日改訂)

### (1) 名称

本学会を神戸女学院大学英語英文学会と称する。

### (2) 目的

本学会は本学英文学科卒業生および大学院英文学専攻修了生の学術研究の継続と発展を奨励し、それら研究活動の発表と交流をはかり、あわせて在学生の向学研究意欲を推進することを目的とする。

### (3) 構成

本学英文学科卒業生、大学院英文学専攻修了生有志および本学英文学科教員、元英文学科教員を正会員とする。在学生を準会員とする。

### (4) 活動

年一回、英語英文学会大会を開催する。  
Newsletterを発行し、会員の活動、英文学科の現況、本学英語英文学会その他の活動の内容を報告する。  
その他。

### (5) (a) 上記の活動運営のために運営委員会をおく。

(b) 運営委員会は、学科長、学科会計委員と、若干名で構成されるものとする。

## 内規

### I. 大会での発表について

- (1) 発表希望者は毎年7月1日までに、発表論文の簡単なレジュメと略歴を添えて、英文学科事務室まで申し込み、KCSES運営委員会で審査の上、決定する。

### II. 維持費・参加費について

- (1) 在学生を除き学会参加者は参加費500円を学会当日に納入する。
- (2) 英文学科教員は年に500円を維持費として納入する。
- (3) 維持費・参加費の徴収、及び郵送費などの経費の支出は、学科の会計委員が担当する。
- (4) (3)に関しては、KCSES専用の口座を利用する。



## 編集後記

よりグローバル化した社会の実態を反映させるべく、KCSSESとして新たなスタートをきって、無事2年が過ぎました。今後とも何卒変わらぬご支援の程よろしく願い申し上げます。

会員消息・出版物のご連絡、ありがとうございます。会員の皆様のご協力に感謝申し上げますと共に、今後の益々の研究の発展をお祈りいたします。

## KCSSES Newsletter 編集委員

(2012年度運営委員)

○Shawn BANASICK ○溝口薫 ○立石浩一 (ABC順)

## KCSSES Newsletter No.28

編集発行 神戸女学院大学英語英文学会

〒662-8505 西宮市岡田山4-1

Tel (0798) 51-8548 Fax (0798) 51-8532

<http://www.kobe-c.ac.jp/english/gakkai/gakkai.html>

2013年3月発行